◆　世田谷都税事務所長賞　◆

「税金の使い方」

東京都市大学付属中学校　３年　一関　律

東京都西新宿二丁目に位置する超高層ビルの中で、一際存在感を放っているのは東京都庁舎だろう。1990 年の竣工時は日本一の高さを誇り、現在も西新宿では一番の高さを誇る、東京のランドマークの一つである。

みなさんはこの東京都庁舎が「タックスタワー」と揶揄されていることをご存知だろうか。竣工した 1990 年代といえばバブル崩壊により日本が一気に不景気になった時期、そんな時に豪華で背の高い都庁舎を建ててしまっては「税金の無駄遣い」と思われてしまっても仕方ないだろう。

しかし、本当に税金の無駄遣いだったと言えるだろうか。東京都庁舎の建設費 1569 億円は、同年代の超高層ビルである横浜ランドマークタワーの建設費約 2700 億円や、ＪＲセントラルタワーズの建設費約 2000 億円と比べるとそこまで高い金額というわけでもなく、なにより都庁舎の 45 階に位置する展望台は都内有数の観光地であり、今日も多くの外国人観光客が訪れていることを考えると数字にならない利益はかなり大きいと考えられる。このことをふまえると、東京都庁舎は決して失敗した建築物とはいえないのではないだろうか。

そんな東京都庁舎の展望台から南東を望むと、新国立競技場が見えてくる。2020 年の東京オリンピックのために建設された新国立競技場の建設費は 1529 億円と、奇しくも東京都庁舎とほとんど同じ額である。しかし東京都庁舎とは違い、1529 億円はスタジアムとしてはかなり高額である。実際に北京オリンピックのメインスタジアムである北京国家体育場の建設費約 500 億円や、ロンドンオリンピックのメインスタジアムであるロンドン・スタジアムの建設費約 800 億円と比べると、新国立競技場だけが頭一つ抜けていることがわかる。そこまでして作ったにも関わらず、屋根がないことやトイレが少ないことなどの使い勝手の悪さから「深刻立競技場」と揶揄されてしまっており、2025 年から民営化されるということだがまだ買い手が現れていないという状況が続いているそうだ。この現状を考えると、新国立競技場は決して成功した建築物とは言い難いのではないか。

東京都庁舎と新国立競技場の事例から分かることは、税金の使い方の大切さである。この二つの建築物はほとんど同じ建設費で作られたにも関わらず、ここまで使い勝手に差が生まれてしまっている。ここでは建築物をベースに説明したが、これは税金がかかわるあらゆる事業において言えることである。

国家を維持するためだけでなく、これから先の国際社会で日本が存在感を発揮していくためにも税金は必要不可欠なものである。しかし、税金は国民の信頼のもと集められたお金であり、その使い方を再考することは大切だと考える。